一般財団法人

「知と文明のフォーラム」設立記念会

第一部　一三：〇〇より
シンポジウム「知と文明の転換のために」

第二部　一五：三〇より
レクチャー・コンサート
ベートーヴェン、リスト、新実徳英、西村朗の作品

第三部　一八：〇〇より
設立記念パーティー

二〇一一年一〇月一日（土）
日本出版クラブ会館

00B.indd 1
11.9.14 7:52:26 PM

一般財団法人

「知と文明のフォーラム」設立趣意書

わが国におけるエコロジカル・フェミニズムの主唱者であり、《不滅の恋人》問題を中心とする世界的なベートーヴェン研究者であった故青木やよひの遺産にもとづき、一般財団法人「知と文明のフォーラム」を設立することにいたしました。設立の目的は、財団の定款第三条に規定されています。

すなわち、「この法人は、わが国の知及び文化や芸術などの水準の向上に貢献し、また未来に向け、新しい知と文明のあり方を探求し、それらの成果を社会に提供する事業を行うことを目的とする」。

この知と文明のフォーラムは、すでに任意団体として二〇〇六年から活動をはじめ、各種セミナー、シンポジウム、レクチャー・コンサートなど多彩な事業を展開するとともに、ブログをも開設し、新しい知や文明のあり方を模索し、発信してきました。その活動は一定の成果をえたものと自負しています。財団の設立は、その一段の強固な発展を目指すものです。

すでに、利便や効率をはかる経済合理性の追求にのみ依存してきた近代文明は、地球資源の収奪と浪費によって自然環境を破壊し、人類生存の危機をもたらすとともに、国際的・国内的格差を増大させ、国家間・国際ブロック間の葛藤や紛争を拡大してきました。とりわけ情報革命と金融工学を背景に、経済的世界制覇をめざしたグローバリズムの崩壊は、こうした近代文明の限界を露呈したものといえましょう。

さらには東日本大震災です。震災がもたらした福島第一原子力発電所三基の原子炉の炉心溶融を頂点とする大事故は、この文明が致死的なデッド・エンドに陥ったことを象徴しています。この方向の外挿法的な延長上には出口はありません。文明の転換、さらにはそれを支えてきた近代の知の転換が、いままさに必要とされているのです。

この時にあたり、私たちは決意をあらたに、ささやかながらこの転換に向けての知的・文化的・芸術的努力を進め、いささかなりともわが国や世界の未来に貢献したいと望んでいます。

二〇一一年一〇月一日

代表理事　北沢方邦

00B.indd 2　11.9.14 7:52:27 PM

設立記念シンポジウム・パネリスト紹介

坂本義和

一九二七年米国ロサンジェルス生まれ。東京大学法学部卒業。同大学法学部助教授、同教授、のち明治学院大学教授、国際基督教大学平和研究所客員所員を経て、現在東京大学名誉教授。その間に国連研修所特別研究員として「国連の将来」プロジェクトを担当。国際平和研究学会（IPRA）代表、地域組織アジア平和研究学会（APRA）代表、ユネスコ平和教育賞審査委員、ストックホルム国際平和研究所（SIPRI）学術評議員、国際研究プロジェクト「世界秩序の構想（WOMP）」共同代表などをつとめる。国際政治学・平和研究を専攻。著書に『人間と国家』上下（二〇一一年、岩波新書）、『相対化の時代』（一九九七年、岩波新書）、『坂本義和集』全六巻（二〇〇四―五年、岩波書店）など。

大内秀明

一九三二年東京生まれ。東京大学経済学部卒業、同大学院修了。明治学院大学講師、東北大学教養部講師、同助教授、教授、その後東北科学技術短期大学長、白鴎大学客員教授を経て、現在東北大学名誉教授および財団法人みやぎ建設総合センター所長。経済学を専攻、経済学博士。現在脱近代思想の先駆者としてウィリアム・モリス、宮沢賢治を研究する。一九七〇―八〇年代には日本社会党系のシンクタンク「平和経済研究所」代表や同党「影の内閣」経企庁長官などをつとめ、社会的にも大きな影響力をもった。著書に『価値論の形成』（一九六四年、東京大学出版会）、『多極化のなかの日本経済』（一九七二年、河出書房新社）、『ソフトノミックス』（一九九〇年、日本評論社）、『恐慌論の形成』（二〇〇五年、日本評論社）、『賢治とモリスの環境芸術』（二〇〇七年、時潮社）など。

岡部憲明

一九四七年静岡県生まれ。早稲田大学理工学部卒業。フランスにてポンピドゥー・センター設計チームに参加。またレンゾ・ピアノ・ビルディング・ワークショップのパリ・チーフアーキテクト、同ワークショップ・ジャパンの代表取締役を経て、現在岡部憲明アーキテクチャー・ネットワーク主宰、神戸芸術工科大学教授。芸術工学博士。関西国際空港ターミナルビルの設計コンペに優勝、プロジェクト・リーダーとして建築を主導する（一九九五年日本建築学会賞作品賞受賞）。その他、牛深ハイヤ大橋（二〇〇一年土木学会景観最優秀賞）、ベルギー大使館などの設計・建築にたずさわる。また小田急ロマンスカーVSE（二〇〇六年度アジア・デザイン大賞）、同MSE（第一〇回ブルネル賞）など産業デザインも手掛ける。著書に『関西国際空港旅客ターミナルビル』（一九九四年、講談社）、『エッフェル塔のかけら』（一九九七年、紀伊国屋書店）、『可能性の建築』（二〇〇五年、NHK出版）など。

西村　朗

一九五三年大阪生まれ。東京芸術大学作曲科卒業、同大学院修了。現在東京音楽大学教授、いずみシンフォニエッタ大阪芸術監督。ルイジ・ダッラピッコラ作曲賞、尾高賞（受賞五回）、京都音楽賞、サントリー音楽賞などを受賞。一一歳のときベートーヴェンの『第九』に魅せられ作曲家を志す。のち西欧作曲技法の頂点にあるラヴェルらの珠玉の作品に触れて西欧の伝統から前衛にいたる技法から意識的に遠ざかり、東南アジアの伝統音楽や日本の雅楽などに新しい世界を探る。それらの現代化としての多層的ヘテロフォニーの作曲技法を創りだし、今日にいたる。作品に『二台のピアノと管弦楽のためのヘテロフォニー』『幻影とマントラ』『蘇莫舎［そまくしゃ］』など作品約二〇〇曲。著書に『光の雅歌』（二〇〇五年、春秋社）など。

北沢方邦

一九二九年静岡県生まれ。桐朋学園大学音楽学部教授、信州大学教養部教授、神戸芸術工科大学・大学院教授を経て、現在信州大学名誉教授。構造人類学・科学認識論・音楽社会学専攻。一九七〇―八〇年代にパフォーマンス・グループKIVAを、また政策集団21世紀クラブを主宰。科学認識論関係の著書に『構造主義』（一九六九年、講談社現代新書）、『知と宇宙の波動』（一九八九年、平凡社）、『近代科学の終焉』（一九九八年、藤原書店）、構造人類学関係に『ホピの太陽』（一九七六年、研究社）、『日本神話のコスモロジー』（一九九一年、平凡社）、『感性としての日本思想』（二〇〇二年、藤原書店）、『古事記の宇宙論』（二〇〇四年、平凡社新書）、音楽社会学関係に『メタファーとしての音』（一九八六年、新芸術社）、『音楽入門』（二〇〇五年、平凡社）、その他『ヨーガ入門』、『風と航跡（自伝）』『目にみえない世界のきざし（詩集）』など。

レクチャー・コンサート出演者紹介

パーク・ヨンヒ

ピアニスト、在日コリアン二世。桐朋女子高等学校音楽科卒業後、スイス国立チューリヒ芸術大学音楽科を最優秀で卒業、同大学研究科修了。ウィーン・ピアニスト・コンクール特別賞受賞。帰国後リサイタルなどを開催。また、『ゴールトベルク変奏曲』（チェンバロ）、『ゴールトベルク変奏曲の八つの低音にもとづく一五のカノン』（ゾーンライトナーとの二台のチェンバロ）、『バッハ：パルティータ第六番／ブラームス：ピアノ作品集作品七六』などのCDをリリース。古典から現代にいたる作品に意欲的に取り組む。二〇〇七年二月、知と文明のフォーラム主催レクチャー・コンサート「不滅の恋人にみるベートーヴェンの変貌」に出演する。

新実徳英

東京大学工学部卒業。東京芸術大学作曲科卒業、同大学院修了。現在桐朋学園大学大学院教授・同大学特任教授。東京音楽大学客員教授。バレエ曲『アンラサージュ』により第八回ジュネーヴ国際バレエ音楽作曲コンクールで史上二人目のグランプリおよびジュネーヴ市賞を受賞。『協奏的交響曲』で第五五回尾高賞受賞、その他文化庁芸術祭優秀賞・同大賞など数々の受賞作品を書く。いわゆる西欧前衛音楽などの型にまったくはまらず、東洋や日本の伝統音楽に霊感をえた自由で闊達な作曲技法によって脱近代の新しい音楽創造のあり方を示す。主要作品に上記の他、和太鼓とパイプオルガンと管弦楽のための『風神・雷神』、管弦楽のための『創造神の眼』、同『焔の螺旋』、ヴァイオリン協奏曲『カントゥス・ヴィターリス』Ⅱなど、また室内楽・ピアノ曲・二十弦箏曲・歌曲など多数の作品がある。

総合司会

宇野淑子

作家、アナウンサー。東京教育大学卒業後TBSに入社。定年退職後フリーに。著書に『離別の四十五年―戦争とサハリンの朝鮮人』（一九九〇年、潮出版社）、『私の介護家族戦争』（二〇〇二年、講談社）。

00B.indd 3　11.9.14 7:52:28 PM

設立記念シンポジウム

知と文明の転換のために

設立趣意書で述べたように、多大の犠牲をもたらした東日本大震災と、それにともない世界を震撼させたフクシマ原発大事故は、近代文明の終末を予感させる象徴的できごとであった。自然環境の破壊に直面し、すでに一九六〇年代末からあげられていた近代文明転換の声は、いまや切実なものとなったといえよう。

いうまでもなく、近代文明を支え、発展させてきた原動力は近代の知である。精神と身体あるいは知と物質の二元論に立ち、みずからの存在の根源である身体性、いいかえれば「自然」を忘却してきた近代の知は、いまやみずからの身体性をふくむ自然全体の復讐を受けつつあるといっても過言ではない。

文明の転換は、まずこのような知の転換でなくてはならない。それは究極には世界の見方、あるいは宇宙の見方の転換であり、現実的には、政治や経済の直面している状況の解読の仕方、あるいは文化や芸術や知的財産などのあり方の転換であるといえよう。

いまむしろ、知の分野や科学、あるいは芸術の最先端で、近代の知の転換を先取りするさまざまな知見やこころみが出現している。こうした知の状況をふまえ、わが国のそれぞれの分野で主導的な役割を果たしてきた以下の方々から、専門にもとづく問題提起をしていただき、知と文明の転換への展望を切り拓きたいと念願している。このシンポジウムを一般財団法人「知と文明のフォーラム」設立記念行事の冒頭に据えたゆえんである。

（北沢方邦）

報告要旨（発言順）

二一世紀の地球政治的課題　坂本義和

人間がモノ、動植物、ヒトを資源として利用・活用する社会組織の再生産の様式が文明であろう。資源を組織的に利用するにはエネルギー操作の技術と権力が要る。それは、古代から、多様な形での男女の奴隷的労働と動物の労働として続いた。一八世紀の蒸気機関の開発により、ヒトの生産性が上がり、奴隷制は公式には不要となった。一九世紀後半には電気時代となり、生産・消費と通信の効率が高まるとともにヒト余り（失業・恐慌）が増えた。二〇世紀中葉には核時代に入り、原子力が生産・消費に利用されるものの、それは本来、人類にとり恐るべき凶器だった。生産力の画期的上昇は、破壊力の未曾有の増大でもある。生産力を競う植民地支配や戦争によって資源を争奪してきた「先進国」のヒトは、モノや動植物の枯渇をもたらしてきた。現在「後発国」は、猛烈な勢いで「先進国」モデルを追求している。二〇五〇年には九〇億の人口が予測されている世界で、人類はどのようにして共生していくのだろうか。これは国家間の国際政治ではなく、地球政治の問題だ。

東日本大震災と文明の大転換
―宮沢賢治とW・モリスに学ぶ　大内秀明

（一）三陸大津波と宮沢賢治の生と死を考える
一八九六年　明治三陸大津波　W・モリスと賢治の誕生
一九三三年　昭和三陸大津波　宮沢賢治の死
二〇一一年三月一一日　東日本大震災・平成三陸大津波
（二）福島原発事故が提起しているもの
原発安全神話の崩壊と近代科学文明の限界、原子力利用は可能だったのか？
（三）戦後日本の東北開発の軌跡と原子力エネルギー基地
地域資源立地型から輸入資源エネルギー革命、「原発銀座」はなぜ開発されたか？
（四）自然エネルギーと文明の転換の今日的意味
ＩＣＴ（情報通信技術）＋ＬＣＥ（低炭素経済）＝新産業革命の歴史的地位は何か？
（五）宮沢賢治とW・モリスの環境芸術から学ぶもの
「自然と芸術」「労働と芸術」の質的転換、自然エネルギーへの回帰の歴史的意義

パブリックスペースと人間性　岡部憲明

石造や木造による古典時代からの都市空間は一九世紀にはじまる鉄とガラスの技術革新の中で大きく変容した。ヨーロッパにおける鉄道駅や博覧会施設、ニューヨークの摩天楼は世界を急激に変えていった。これに続く現代はコンピューターによる計算能力の著しい進歩の上により巨大で複雑な構築物、建築の建設が世界の各地で進められている。こうした今日の人工環境構築の計画の中で忘れられてはならないのは、人間の身体性、知覚に対する考察だろう。空港ターミナルビルや大規模鉄道ターミナルなどの移動空間の中にも人間性に配慮したデザインは求められるべきであると思う。広場や公園などの都市の外部空間、建築の外装の素材やディテールにも人間のための空間を生み出すための方法は組み込まれていく必要がある。人間の身体性、知覚をテーマに今日のパブリックスペースの持つべき可能性を語ってみたい。

ベートーヴェンについて思うこと　西村　朗

私見によれば、ベートーヴェンは音楽史上における最初の「作曲家」である。彼は音楽作品すなわち「曲」を「作る」ことに、人生をかけて専心した。彼は一作ごとに徹底的に創意を注ぎ、前例を超えて磨き抜き、高い完成を希求した。加えて彼は、そこに自らの精神活動と人生体験を「表現」しようとした。そしてベートーヴェンは、一曲一曲に誇り高く署名した。以後は、誰がそれを作曲したのか、という署名性が、作曲家という存在を意味づけることとなった。彼以前のバッハやモーツァルトの作品には元来そうした性格は薄い。さらにまた別の言い方をすれば、ベートーヴェンは自らのために作曲を続けた最初の例でもある。彼は同じようなものを二つ以上は決して作らなかった。なぜなら同じものを二つ以上、自ら所有する必要が無かったからである。すなわち、彼の作品は彼自身のために作られ、彼自身が所有者であった。晩年の大作『荘厳ミサ曲』でさえ例外ではないように思われる。そのような観点から愚考を通じて、今、ベートーヴェンの仕事について、さらには人と音楽との関係について思うことの一端を述べさせていただきたい。

司会と補遺　北沢方邦

科学認識論の立場から補遺的報告をさせていただきたい。すなわち二〇世紀の最後の数十年からはじまったある種の「科学革命」またはパラダイム・シフトである。ひとつは物理学であり、ひとつは生物学である。量子力学は確率論的で異常な微視的世界の像を明らかにしたが、それをコペンハーゲン解釈の二元論に閉じ込めてしまった。この二元論の絶対的矛盾を解決する多重世界解釈やストリング理論が登場し、それが近代科学の伝統的パラダイムの決定的転換、世界像の大転換であることが明らかになった。生物学でも分子生物学が遺伝子レベルでの生物の仕組みの画期的発見をしたが、それを遺伝子決定論というかたちで新ダーウィン主義が誤った解釈を普及させた。だが微生物科学の新しい諸発見や、後天的・環境的要因が遺伝子配列（ゲノム）さえも変異させるというエピジェネティックス（後発生遺伝学）がその解釈をくつがえし、無生物さえ含む万物の共生と環境の後天的作用、そしてそれらによる進化という、ダーウィン進化論を書き換えるパラダイム・シフトがはじまっている。

設立記念レクチャー・コンサート趣意

故青木やよひの遺産による財団設立記念レクチャー・コンサートは、当然青木やよひの知的遺産の継承を意図するものである。たしかに、青木の提唱したエコロジカル・フェミニズムは、フクシマ後の今日、いまこそその必要を声高に主張すべきであるが、それは別の機会に譲ろう。

ここでは世界的に評価されている彼女のベートーヴェン研究の中心となった作品と、ベートーヴェンの後期様式の継承者・発展者として彼女が高く評価していたリスト・フェレンツ（フランツ・リスト）――今年は彼の生誕二百年記念でもある――の作品、またかつて西欧近代音楽の枠を超えた彼らのように、いわゆる現代音楽の枠組みを大きく超え、日本をふくむアジアの広大な音の宇宙を、新しい音楽的普遍性のもとに展開している作曲家、新実徳英と西村朗の作品をとりあげよう。いわゆる現代音楽をつねに敬遠していた青木やよひであるが、新実徳英や西村朗の作品は好んで聴いていた。そこに文明の転換後の未来の音楽を発見していたのかも知れない。

（北沢方邦）

演奏とトーク

トークⅠ　青木やよひのベートーヴェン研究――新実徳英　北沢方邦

演奏　ベートーヴェン――ピアノ・ソナタ変イ長調作品一一〇

ピアノ　パーク・ヨンヒ

休憩（一〇分）

トークⅡ　リストの生誕二百年記念と二一世紀の音楽――新実徳英　パーク・ヨンヒ　北沢方邦

演奏　リスト――泉のほとりにて（『巡礼の年』第一年スイスより）

愛の夢

新実徳英――風は見る…（『風のプレリュード』より）

アリランから未来へ

西村　朗――アリラン幻想曲

ピアノ　パーク・ヨンヒ

00B.indd 6　11.9.14 7:52:30 PM

ベートーヴェン

ピアノ・ソナタ変イ長調　作品一一〇

第一楽章　四分の三拍子　変イ長調

第二楽章　四分の二拍子　ヘ短調

第三楽章　序奏　四分の四拍子／フーガ　変イ長調

八分の六拍子

作品一〇九につづく作品一一〇は、《不滅の恋人》との愛の挫折に由来する心の痛手と苦悩をうたっているといっても過言ではない。まず、第一楽章主題の後半である。これは『ヴァイオリン・ソナタト長調』（作品三〇―三）の第二楽章テンポ・ディ・メヌエットにも登場するが、明らかに、グルックのオペラ『オルフェオとエウリディーチェ』のオルフェオのアリア「われエウリディーチェを失えり」の旋律のひそかな借用であるといえる。失った妻エウリディケーを嘆くオルフェウスのアリアは竪琴風の伴奏でうたわれるが、ベートーヴェンの作品一一〇のこの楽章では、この嘆きは同じく竪琴風の分散和音となって砕け散る。この嘆きの歌は、第三楽章のアダージョ・マ・ノン・トロッポの深淵、あるいは《心の冥府》の扉を開くが、まさにそれは「嘆きの歌（Klagender Gesang）」と名づけられている。この「嘆きの歌」は、それを克服しようと努力するフーガのあとで再現するが、そのときは「力尽き、嘆きつつ（ermattet.klagend）」と、さらに苦悩を深める。この「嘆きの歌」が、のちに書かれ、アントーニア・ブレンターノに献呈された『ディアベッリ変奏曲』の第三一変奏に再現されていることは注目されていい。前者は変イ短調、後者はハ短調と調性は異なるが、まったく同じ音域で「嘆きの歌」を展開する。そのうえ後者でも、これにつづくのは、前者のフーガより力強い二重フーガ（第三二変奏）であり、苦悩の克服もより強いものとなっている。（北沢方邦『ベートーヴェン〈不滅の恋人〉の探究』（青木やよひ著）付録より抜粋）

リスト

泉のほとりにて

（『巡礼の年』「第一年スイス」より第四番変イ長調）

『巡礼の年』は、全三集計二六曲（「第一年スイス」「第二年イタリア（ヴェネツィアとナポリが補遺）」、「第三年」）からなり、リストのピアノ作品の中で、ピアノ・ソナタと並ぶ最高傑作である。「第一年スイス」は、リストが二二歳のころに出逢ったマリー・ダグー伯爵夫人とのジュネーヴへの逃避行の際に得た感動が収められた「旅人のアルバム」という曲集に、後に数曲が加えられた作品集である。「旅人のアルバム」は旅行中の一八三五―六年に作曲され、この間にリストは、開校されたばかりのジュネーヴ音楽院で教鞭もとっている。アルバム四曲目の「泉のほとりにて」は、二四歳で既に熟達した作曲技法により、若きリストの瑞々しい感性が映し出された作品である。タイトルは、フリードリッヒ・フォン・シラーの一節による。（パーク・ヨンヒ）

リスト

おお、愛しうる限り愛せ

（『愛の夢――三つのノクターン』より第三番変イ長調）

リストの作品の中で最も親しまれている小品である。もともとは一八四三年頃に、ドイツの詩人ヘルマン・フェルディナント・フライリヒラート（一八一〇‐七六）の詩による独唱歌曲として作曲されたが、この詩に寄せて一八五〇年にピアノ独奏曲が作曲され、『愛の夢――三つのノクターン』の中の一曲として出版された。このころのリストは、それまでの一〇年間に及ぶ演奏活動にピリオドを打ち、一八四八年に、かつてバッハが活躍した地であるヴァイマールの宮廷楽長に就任した。そして、二人目のパートナーとなったカロリーネ・フォン・ヴィトゲンシュタイン伯爵夫人の助言もあり、以来作曲に専念する。「おお、愛しうる限り愛せ O lieb, so lang du lieben kannst!」から始まるこの詩は、「おまえがお墓の前で嘆き悲しむその時は来る。だから、愛しうる限り愛しなさい。自分に心を開く者がいれば、その者の為に尽くし、どんな時も悲しませてはならない……」という内容である。（パーク・ヨンヒ）

新実徳英

風は見る…（一九九二）

世界中を旅する風が、いろんな土地で聴いた旋律や歌を僕のところに運んでくれる――いわば〈私〉を捨てたところから作曲が始まる――、そんな発想によるピアノ曲集が『風のプレリュード』（一九九二年、カワイ出版）で、「風は見る…」はその最終曲。自由な拍節法の中で揺らぐ〈風〉の〈透明な眼〉はなにかを見、なにかを私たちに語りかけてくれる。それは人間を育んでくれる風＝大自然が配ってくれる優しさのようなものであるのかもしれない。（新実徳英）

新実徳英

アリランから未来へ（二〇〇二）

全体は四つの部分からできている。最初の部分はアリランの五音音階の複調的提示、第二の部分は低音域でのとつとつたるアリラン、経過部をはさんでの第三の部分は朗々たるアリラン、第四の部分はコーダである。常に使われるソステヌートペダルによる独特の余韻を、未来に向かっての柔らかな光のように感じている。（新実徳英）

西村朗

アリラン幻想曲（二〇〇二）

このピアノ曲は、作曲家の林光さんらが中心になって企画された、東京での「アリラン」を特集した演奏会のために作曲したもので、タイトルが示すとおり、有名なアリランの旋律にもとづく自由な構成の幻想曲である。このノスタルジックな東洋的旋律を知ったのがいつだったのか全く思い出せないが、大阪での少年時代、一〇歳以前であることはほぼ間違いない。国や時代や言葉を超えて、子供心にもしみ入る名旋律だと思う。（西村朗）

00B.indd 7　11.9.14 7:52:31 PM

一般財団法人　知と文明のフォーラム
役員他名簿

評議員

石田久仁子
上野信一
田中亮二

理事

北沢方邦（代表理事）
片岡みい子
片桐　祐
佐藤優子
寺本倫子
徳武智栄
林　祐子
森　淳二

監事

藤岡　巧

運営委員

大東愛子
杉山直子
平井裕公
森　宏徳

顧問

大内秀明
岡部憲明
坂本義和
篠原　一
杉浦康平
新実徳英
西村　朗
樋口恵子
八巻和彦

連絡先　一般財団法人　知と文明のフォーラム
〒413-0232 伊東市八幡野１１０５番地の５７
chitobunmei@gmail.com

00B.indd 8　11.9.14 7:52:31 PM